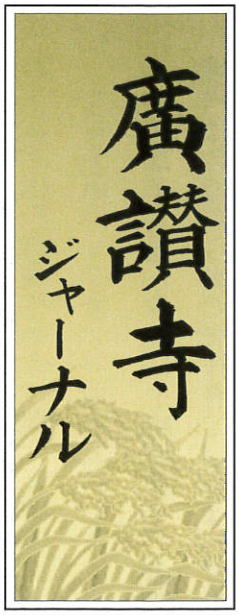

第 35 号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341

四苦・八苦・について

この言葉は仏教語であるが日常生活においても使用されている。それだけ一般化している言葉でもある。

「わしよ、このころよ、赤ちゃんが産まれるやら、上の子は保育園へ送り迎えするやら、おじいちゃんは入院するやら忙しくてよ。四苦八苦してるだわ」なんて会話を耳にする。

人間として生まれた以上は生・老・病・死の四苦はいやでも応でも自分の責任においてすまさねばならない。人生の起伏は自分の力量で越えねばならない。誰も代わってくれる者はいないのだから。

次の四苦を加えて八苦である。愛別離苦（あいべつりく）・怨憎会苦（おんぞうえく）・求不得苦（ぐふとくく）・五陰盛苦（ごおんじょうく）。これは原則からの派生的なものである。誰でも知っている愛別離苦とは男女の縮図のようなものである。

ある日のこと「だんなのお骨を廣讃寺に納めたい」と申し出てきた女がいた。そして私も一緒に入れてくれと哀願した。生きているお前がいくらたのんでもお墓には入れないぞ。身寄りでもあれば「その者によくたのんでおけ」と名刺を渡して、もう忘れかけていた四年目のある日に、半田から来たものだが「姉のお骨をたのむ」という。この辺までの会話で、夫のお骨をたのみに来たあの女性の事かと思い出した。立派な家庭をすて屋台女(私の姉)と二人生活をした遺言ですのでとその妹と称する女はいう。人目をはばからず老夫婦の人生に人間のよしあしをかんじた。

在地願為連理枝・在天願作比翼鳥の名句を思った。

廣讃寺二十八日講総会に思う

釋和美

彼岸月の二十八日は、廣讃寺二十八日講員総会である。一年で二回ある総会では、半年間に亡くなった人の追悼会と会員相互の親睦を計る日である。

会員は稲葉地上の切、西の切と東宿で、寺と檀家は関係なく昔は男のみであったが、今では男女誰でも会員となれる。私は父が死亡した昭和五十五年より講員を相続した。

その頃は講員総数七十名程で大盛況。酒を飲みながら大いに親睦を計った。それが平成二十二年秋総会には、総員三十四名と半減した。

講員の皆様どうしてこうなったか考えましょう。そして多くの友を入講させ、楽しく念仏を申しましょう。

会費は春秋彼岸の日の自分たちの食事だけです。孤独死や近所つきあいのない人生は地獄の一歩だと思います。

20組・本山お待受け法要に参加して（11月24日）

村上三智雄

バスは予定通り本山に十時に着く。山門をくぐると広い境内は各地から来た参拝者でいっぱいであった。私たちは寄り添って御影堂に進み、本堂に入る。室中も参拝者でいっぱいだった。左手隅の方から前の空いていそうな所へと進む。運よくテレビの付いた柱の前に座ることができた。内・中陣から百人近くの僧侶の読経が続き、途切れるとテレビに次の読経の題名が出るので進行がよく分かった。でも伽陀から念仏は経本でなんとかついていけたが、文類偈になるとムニャムニャとはやすぎて聞こえるだけだ。約二分ぐらいの超特急でとてもついていくことはできかねた。でも行きのバスの中で了通寺の住職さんのご指導や伴僧の伊藤さんのプリントが、とても参考になり報恩講にちょっとお参り出来たと感謝の気持でいっぱいとなった。また来年はあのご真影の間近くに座れるかなあと期待しつつ本堂を出る。

しばらく自由時間の後、清水寺近くの粟田口順正で湯どうふの昼食をとった。付近は紅葉の真っ盛りで人・車がごった返していた。一時過ぎていて空腹だったので飯も湯どうふもおいしかった。

次の会場大谷大学へ直行する。今博物館で宗祖の特別展を拝観させていただいた。既に案内されていたように、最近発見された聖人の四十八願文抜書の真筆を拝観する。願文の切った一部が真筆という根拠は「国」の字の筆致が決

め手だった由、まだ断片は散逸しているので我々の身近な所にも埋もれているよと、解説者より示唆があった。

大学を後にした頃には堀川通のイチョウ並木の黄葉はすばらしくバス内歓声がわいた。大津の土産店に着いた頃はまっ暗だった。今日はほんの少し土産を買った。充実した一日旅行といった気持ちである。

（解説　山下一海より）

最近テレビで竜馬伝、坂の上の雲に話題になっている正岡子規について少し調べてみました。

『正岡子規の役割』

近代の俳句は正岡子規によって始った。子規が俳句の革新にのり出したのは明治二十年代になってからのことである。それまであった俳諧は世の中の変革により新しい時代にふさわしい俳諧が生まれることになった。そういう動きに乗ったのが子規である。

江戸時代以来の小さな理知の働きによる俳句を月並として否定し、近代化するために洋画の技法に学んだという写生の方法は分かりやすく有効であった。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺　子規

いくだびも雪の深さを尋ねけり　子規

鶏頭の十四五本もありぬべし　子規

よく知られている佳句である。素直な感受性による表現ははなはだ新鮮なものである。

子規は明治三十五年「病床六尺」の中に「草花の一枝を枕元に置いてそれを正直に写生していると、造花の秘密が段々わかってくるような気がする」と書いている。造花は自然の成り立ちをいう。これは死を間近にした子規の究極の心境であったろう。

子規は従来尊敬されていた芭蕉にかわって蕪村を尊重すべきことを説いた。子規の蕪村観は明治三十年に執筆された「俳人蕪村」にまとめられている。要旨は、俳句は多様で複雑なものであることを世に知らせる意味があった。それが新しい俳諧史観の確立につながったのである。

『死去の前日の句』

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな　子規

をととひのへちまの水も取らざりき　子規

痰一斗糸瓜の水も間にあはず　子規

小春日や人人人の浅草寺
朱に映ゆる銀杏もみぢの観音寺
日光の楓もみじの色の妙
枯芒いにしへよりの千曲川
ぬばたまのランプの宿や雪女郎

にわえみこ

行事予定（二月）

二月十二日（土）七時半　同朋委員会・例会
（役員は七時）
十九日（土）二時～四時　学習会
二十八日（月）十時　二十八日講・女人講

行事予定（三月）

三月十二日（土）七時半　同朋委員会・総会
（役員は七時）
十九日（土）二時～四時　学習会
〔春季彼岸永代経・蓮如講　執行〕
三月二十一日（祝）十時　おつとめ・委員長報告
おとき　説教　前田健雄師
一時　おつとめ
三時　帰敬式
二十二日（火）三時　おつとめ・法話
二十三日（水）三時　おつとめ・法話
二十四日（木）女人講・報恩講
十時　おつとめ・住職法話
おとき
一時　おつとめ・住職法話
二十八日（月）二十八日講・総会